

## ヒフカの壁



伊東慶悟 ● 厚木市立病院皮膚科

私事ですが昨年結婚し、現在仕事と家庭生活の両方でストレスの多い毎日を送っています。少しでも妻のご機嫌をとるため共通の話題を作ろうとして、妻の好きな犬の名前を覚える事にしました。マルチーズ、ヨークシャー・テリア、ウェルシュ・コーギー・ペンブロークなどなど。それまで犬に全く関心の無かった私にとっては、“犬”というひとくくりの存在でしかなく、いろんな種類の犬がいるという事に驚きました。

ちょうどその頃、養老孟司先生の『バカの壁』を読んでいた、「イタズラ小僧と父親、イスラム原理主義と米国、若者と老人は、なぜ互いに話が通じないのか。そこに『バカの壁』が立ちはだかっているからである。いつの間にか私たちは様々な『壁』に囲まれている」という一文がありました。つまり人間誰でも自分が知りたくないことについては自主的に情報を遮断してしまい、細部に目をつぶって「わかっている」と思い込んでしまうという事です。これを読んで先の犬の件にぴったり当てはまるので、

なるほどと思っていました。

現在私は厚木市立病院に赴任して2年がたち、1人医長として毎日皮膚科の診療のみに追われています。その時ふと考えたのは、自分の周囲は「バカの壁」ならぬ「ヒフカの壁」で包囲されているのではないかと。という事でした。皮膚科外来にいと皮膚科的な診察のみに終始し、画像の読み方やCVをいれるなどの手技的なこともできなくなります。エコーや内視鏡も現在は一般の人の話題にも登場する事なのに自分では器具をどう使うのかもわかりません。他科の分野の知識も日に日に忘れるのみです。確かに総合病院内では皮膚科の事をやっていればそれなりに認められはしますが、「これでいいのだろうか？」と考えてしまうのは私がまだ若いからでしょうか？

しかし実際のところは「ヒフカの壁」の中の世界もはば広く、一つの専門領域で認められるようになるのは容易な事ではありませんが……。

## 富良野記

\*

山田裕道 ● 国際親善総合病院（横浜市泉区）

まとまった休暇の取れない私は、地方での学会のあともう一泊延長して小旅行するのを楽しみにしている。平成16年9月、札幌の褥瘡学会のあとフラノラベンダーエクスプレス3号（Fig.1）に乗って富

良野に行った。JR北海道はクリスタルエクスプレス、ノースレインボーエクスプレス、ニセコエクスプレスという3種類のリゾート気動車を有している。これらが順繰りで富良野行きに用いられている。



Fig.3 「石の家」の風呂の焚口の前で、筆者

私が乗ったフラノラベンダーエクスプレス3号はニセコエクスプレス車両で、2階席こそなかったが、ハイデッカー、パノラマ車両で眺めが素晴らしい。気動車は岩見沢を通過し、滝川より根室本線に入り、全長5kmの滝里トンネルを抜けて富良野盆地に入る。車内放送からさだまさしの軽快な曲が流れてくると気分はすっかり『北の国から』となる。

富良野市麓郷にある「石の家」に行く。ドラマ『北の国から』のなかで田中邦衛さんが演ずる黒板五郎が拾ってきた石を積み重ねて造ったとされる家

だ。緑の自然の中に赤い屋根と赤い風車が映えている (Fig.2)。電気は風力発電、水は裏のせせらぎから引いており、エネルギーが周辺から調達した薪という、ライフラインは自給自足の生活である。電話はない。ドラマの中の話とはいえ、都会の生活に疲れた人には魅力的ではある。五郎さん自慢の岩風呂の焚き口の前で写真を撮った (Fig.3)。中嶋朋子演ずる五郎の娘の蛍や、宮沢りえ演ずる五郎の息子の恋人シュウがここで五郎さんのために風呂を沸かすシーンがうかんでくる。思えば私が子供のころは、薪をくべて風呂を沸かすのは子供の仕事だった。なかなか火がつかず困っていた時、新聞紙、細い小さな薪、太い大きい薪の順にくべよと今は亡き父が教えてくれた。

旅先でも少し変わった建物のクリニックや病院には目が留まる。富良野市の街中に薄緑色にペイントされた板塀の2階建ての医院があった (Fig.4)。板塀2階建ては子供のころ通った小学校の校舎のようで懐かしさがある。患者さんが数名出入りしており、ただ今診療中のようなのである。実はこの医院も1度だけドラマに登場している。五郎さんは札幌の看護学校を卒業した娘の蛍をこの医院に就職させようとするが、都会志向の若い娘は札幌の病院に就職してしまう。父親というものは息子はともかく娘は手元において置きたいものらしいが、実際そううまくいくものではない。さて私の場合はどうなることか、避けては通れない運命にありそうだ。

※Fig.1、Fig.2、Fig.4は巻末に掲載

## 我が愛車は市内一のボロ車



栄枝重典 ● 栄枝皮膚科 (秦野市)

「あれが先生の車か、先生の車汚い」「なぜあんなに汚いんだ」「きれいな車、なぜ買わない。先生、

金ないのか」「秦野、貧乏人いっぱい居る。家、貧乏。車、きれい」「先生の車、秦野で一番ボロー」

偶然出会ったパキスタン人の患者さんが私の車を見て言った言葉である。あまりのダイレクトな表現に腹も立たなかった。

私は車に全く関心がない、運転が苦手なのである。今のカロラに15年以上乗っている。乗っているというより、持っているというのに近い。というのもほとんど乗らないのである。今の車でこの15年以上の間、秦野市内から出たことがない。

私は日曜、祭日関係なく往診に行っている。高齢化社会となり、最近さらに往診依頼が増えてきた。歩いて30分程度であれば徒歩で行き、それより遠ければ自転車で行く、さらに遠ければ車を使う。車に乗るのは、往診、医師会関係の用事、看護学校の授業等の限られた場合のみで、レジャーに使用することはほぼ皆無に近い。

車の運転は私にとっては大きなストレスである。極度に緊張してしまうのである。1日に1時間程が限界である。それ以上長時間運転すると下痢がはじまる。ストレス性の下痢である。車は私にとって身の危険をおかしても使用しなければならない場合のみ使用するものと考えている。医師会の先生に「栄枝先生は運転で消費するガソリンと蒸発するガソリンと同じくらいではないか」と言われたことがあるが、確かにそれに近い。よく趣味あるいは気分転換にドライブと答える方がいる。趣味であればまだなんとなく分かるが、気分転換にドライブと答える方が理解できない。命がけの気分転換など私には考えられない。

こんな私であるので、もちろん車種などにはこだわらない。私にとって車は「人間を運ぶ箱」という認識しかない、丁度宅急便の箱のようなものである。ミ

カン箱であろうと、フランス製の高級なダンボールであろうと関係がないと同様、どんな形の車であろうと、何色であろうと全く気にならない。私が車に望むことは「前に走ることに、そして止まりたい時に止まれること」それだけでよい。しかし私の車は家族には評判がすこぶる悪い。年頃の娘2人は決して私の車に乗らない、乗っているところを人に見られると恥ずかしいとの理由である。妻は決して娘達を私の車に乗せない、危険だからという理由である。もちろん妻本人も私の運転する車には決して乗らない。

往診先でも時々私の車を見た依頼主が「これが先生のお車ですか。ずいぶんご立派なお車で」と笑いをこらえたような複雑な表情をすることがある。こちら複雑な気分となる。せつかく命がけで往診してやっているのにと言いたくなる。往診依頼も全て快く受けるわけではない。細い山道を行かなければならないようなお宅の場合には送迎を条件に依頼を受けることにしている。自分の車で出かけ細い道に迷い込んでしまった場合、2度と出られなくなる可能性がある。よって不案内であり分りにくく、多忙のため時間の節約を理由に迎えに来てもらい、昼休みに昼食もとらずに往診に出かけることもしばしばである。さすがにお宅までたどり着く自信がないとは言いにくい。

この車も近々買い替えようと思っている。私自身は動く限り乗るつもりであったが、家族がそれを許してくれそうにない。みっともないので買い替えてくれと言われ続け、私もついに決心した。

この会報が出る頃には、私の家の車庫の中には真新しい車が入っているかもしれない。しかし、BMW等の高級車でないことは確かである。

## 鬼の霍乱

\*

内山光明●内山皮フ科（横浜市磯子区）

平成17年早々遂に病に倒れ入院手術を受ける羽目になった。といっても幸い癌ではない。ことの顛末を書けば、「神皮」に載せてくれるという案内を編集委員の先生から受けたので喜んでワープロを叩かせていただく。

さて、小生数年来足腰の衰えを感じていたが、単に68歳という年のせいかと軽く考えていた。6年前の開業以来、通勤以外は歩く機会がなくなった。県立がんセンターのビルの中を運動会のように走り回っていたのが、今や診療所の20坪の檻の中で12時間

近く過ごしている。運動不足は歴然である。しかし自分では木曜の休診日に老人ホーム5カ所、日曜に隔週老人病院1カ所と往診し、普通の人よりは動いているつもりだった。データー上体重は80kg近くなり、ガンマGTPもしばしば100をこえた。加えてヘルツプリンメルンが発見され長嶋茂雄氏の予備軍となってしまった。これは高血圧のためである。自覚症状は何もない。

そのような中で平成17年1月17日（月）、突然下肢のしびれと軽い腰痛、歩行困難を感じた。100mも歩けない。これはただごとではないと考え直ちに整形外科受診、同時に脳梗塞の恐れも考え脳神経外科にも相談した。幸いというか、残念ながらというか脳には特別の異常なく、整形外科では腰椎脊椎管の狭窄が発見された。いわゆる脊椎管狭窄症である。一応保存的に理学療法、リハビリ、針灸など痛みなどは改善したがしびれは徐々に進行した。神社仏閣へのお祓い、またはご加持祈祷など色々したが日頃の行いが悪いためか、御利益はなく、杖なしでは50mも歩けず、駅のホーム、階段などでは転倒を繰り返していた。幸い受け身の心得があるためひっくり返っても大事には到らないがはなはだ危険を感じた。

座っていれば何でもなく、日常の診療は無事にこなしていた。このままではジリ貧で松葉杖、車椅子の生活も近いかなどということでも脊椎の手術を受けるべく色々手配してもらい、いよいよ7月上旬に入院、手術を受けることに決定した。入院先は茅ヶ崎市立病院整形外科。

今回は自分の病気のため非常によい経験をした。患者さんの痛みは頭では判っていても自分が痛くなければ本当には判らない。自分で歩けなくなり、人の苦しみが本当に判るようになった。これを一つのステップとして、また更に勉強して患者さんの苦しみを助けられる様になりたいと思った。

“亡き父母に 備えし我が家の手摺りなど 我が用いる年となるとは”入院に際し一首ものした。丁度神奈川県福祉医療関係の文芸作品募集があり短歌の部に応募したが、もちろん落選した。

#### ◎術後経過（その1）

予定通り平成17年7月3日（日）入院。7月4日（月）、全身麻酔下で脊椎開窓、除圧手術が行われた。

手術は成功裡に終了し、7月5日（火）から歩行訓練、リハビリを開始した。

術後疼痛をのこしたまま、7月8日（金）いささか早急であるがわがまを聞き入れていただき、希望通り退院した。7月11日（月）から痛みを無視して、平常通り診療を行った。

～未だ快気に到らず！～

術後疼痛の厳しさは相当なもので、術後2、3日は快適であったが、退院の前日くらいからそれまで圧迫による麻痺で緩和されていた腰痛も加わり、歩行困難は術前より激しくなった。歩行器、松葉杖を用いればどうにか歩けるが、ほとんど器具に頼る感じである。

いわゆる寝起きなどの立ち居振る舞いがままならないのが何とも歯がゆい。7月10日（日）からどうやら自分の身体を感じが出てきたが、未だ快気に到らずである。リハそのものが随伴する疼痛が怖く長続きしない。しかしこれを越えなければ次のステップに進めないのが、頑張るのは嫌いだが頑張らねばならない。何といてもまだ術後7日目では、こんなものであろう。抜糸終了後は、術後疼痛は徐々に改善した。まず知覚神経の改善があり、次いで運動神経の回復、そして筋肉の不全麻痺が治まるという。全部で、1、2カ月、或いはそれ以上を要するとのお話であった。それでも多少の不自由は残るであろう。

#### ◎術後経過（その2）

術後診療初日。鶴沼から杉田まではタクシーを利



ロフトスタンドクラッチにたより自宅前道路で歩行訓練中

用し診療は椅子に座ったまま、手術はやらないようにしている。

かかるときに威力を発揮するのが電子カルテである。マウスとキーボードを叩くだけで、特に再来の、所見と処方の前回DOが便利だ。休診明けの月曜は130人を越す患者さんが集まり、門前市をなしたがどうにか無事に終了した。7月14日(木)はロフトランドの松葉杖にたより浦舟の市大センター病院へ顔を出した。患者は3名のみ。午後から何故か痛みが嘘のように軽くなりそのまま電車で保土ヶ谷区新井町(西谷)の老健施設ライフモア保土ヶ谷に往診した。駅からはタクシー。無事終了。藤沢まで電車。駅からタクシーで帰った。

15日はタクシー通勤。16日は朝は一寸厳しかったが藤沢までタクシーを利用し、後は電車。3連休で早朝は駅、電車ともがら。帰りは京急で横浜へ出てグリーン車で藤沢へ。このルートも楽である。

～快気未だしといえど遠からじ!～

術後疼痛の厳しさは相当なものであったが、抜糸終了後は次第に楽になり歩行は不自由だが麻痺が改善したため快適である。今までは転んでいたような足のひっかかりが踏ん張れるようになった。寝起きなどの立ち居振る舞いもときにままならないが大体こなせるようになってきた。7月下旬、どうやら自分の身体の変化が出てきた。快気を祝う日も近しと思った。リハそのものが随伴する疼痛がすくなくな

り長続き出来るようになった。調子がよいと、得意の自然体が出てくるようになる。出来るときにやり、やりたくないときはさぼる。

術後4週間過ぎでは、徐々に痛みは薄らいで快方に向かいつつある。

それからが長い。一寸良いかと思うとまだ腰に脊椎管狭窄症独特の重い感じが残る。ピョコタン歩き、或いはビコタン歩きになる。一寸休むとまた良くなる。腰椎上部に狭窄が残っているのも、そのためかなと思うとそうでもないらしい。そもそも発病は数年前になるのであろう。走れない。跳躍すると腰が痛い。妻と歩いていると抜かれる。心房細動のせいだとごまかしていたがどうも筋麻痺の始まりだったようだ。2km歩くのが実は辛かった。長期間患っていた筋麻痺が快復するのは容易ではない。数年は我慢してリハビリに励めということであろうなと思った。

現在は発病前と同じ激務をこなしている。日常診療、老人ホーム往診、各種役員会、学術集会(半分はメーカーがらみの研究会)、10月はまともに家で夕食が食べられるのは10日くらいである。そのうちぶっ倒れるぞといわれながら、もういつ棺桶に片足つつこんでもいい年だから好きなことはやるさ、と開き直りでは無く悟りを開いた様な心境で日々を過ごしている。叩いても壊れそうもなかった内山が杖の要る生活となった鬼の霍乱の報告である。

## おどろきモモの木クリニック・パートXI



宮本秀明●宮本皮フ科(横浜市磯子区)

### 1. 開業しました

「開業医はいいよー。昼寝も出来るし、海外旅行はファーストクラス、外車もクルーザーもゴルフの会員権も手に入るし、子供を医大に入学させられる。悩みは節税だけ」という甘い言葉(「愛人も囲える」

とは言わなかったが)に誘われて、26年間の勤務医生活に別れを告げた。退職25日後に皮膚科診療所を開業したが、よく考えると昼寝以外は無くても一向に困らない物ばかりだし、医学部入学は親の「額力」よりも本人の学力が第一であるのも身に染みた。し

かし病院勤務に比べると私の開業医としての日常は楽である。何故かと言うと「患者が来ない」。勤務医時代はひっきりなしに患者が来て疲れたので、今は休養が取れて実にいい。だが開業資金も尽きて、宣伝費もケチらねばならず、駅看板も電柱看板も断ったが、それでもなんだかんだと懐は苦しい。その結果、家の座布団は綿が出たまま、障子は破れすぎてほとんど木の枠しか残っておらず「太陽の季節ごっこ」（某記事が読んだらどう思うかね）もままならず、布団にうっかり入るとシーツの裂け目に足が入ってどっきりし、5台あるエアコンは14年間動いたことがなく、詰まり気味のトイレの入り口には子供みたいな書体で「大便禁止」と書いてある（どうやって暮らすんだ！）。

## 2. Cカップ、Dカップ

Wカップというから新型の爆裂乳かとおもいきや、サッカーのワールドカップのことだった。そういえば「W杯」なんて略し方もあったが、初めはウィングラスかと思ったね。

## 3. 全～然。

昔、某予備校の壁にこんな落書きがあった。「現役偶然、1浪当然、2浪平然、3浪泰然、4浪悠然、5浪憮然、6浪毅然、7浪哑然、8浪茫然、9浪愕然、10浪慄然、11浪騒然、12浪超然……」そもそも12浪なんているのかな。5浪生活経験者なら身近にいるが……。しかし12年って言やあ、医学部を2回卒業できる年数である。もっとも某週刊誌には、医学部入学後2年間ずつやって12年間在学した果てに放校となり今はラーメン屋をやっている人の話が出ていた。ラーメン屋にもいろいろあり、巷には「カリスマラーメン屋」というのがあるそうだ。マンガ本見ながらやケイタイで話しながら食べてる客を叱ったり、また別の店では客は黙りこくってひたすら麺を口に運び、店主が店員を叱りとばす声だけが店内に響く。こんな光景をテレビで見たが、「患者様」などと呼ぶ昨今の医療機関の卑屈な態度とは大違いだ。「お医者様」なんて、今何処いずこ。そのうち転業が相次ぎ「ドクターラーメン屋」が林立し、「ステロイド抜きで頼むぜ」という注文を受けたり、目玉商品がデルマラーメンだったりする日も近いかも。

## 4. 豪邸紹介（海外編）

日本の未来も明るいものではない……という訳で「シニア世代の海外移住」への誘いは枚挙に遑が無い。「ワンルームマンションの値段でプール付き豪邸が買えます」というパンフレットを見ると、確かにプールはあるが家屋は小生の自宅に毛が生えた程度である。しかし写真の注意書きは以下であった。「オーストラリアの住宅は全て『豪』邸です」。

## 5. タレント再生法

「……で、前に通院していたクリニックでの診断は何だったのですか？」と尋ねると「タレントの×美△子さんと同じ病名を告げられました」とのお答え。??。そのタレントは数年前「美容整形手術で乳首が超ちっちゃくなったの、ならないの」と諸所で騒がれた後からバラエティ番組によく出るようになったが、その患者が示唆する今回の病名を小生は知らなかった。ワイドショーも見とかなきゃ、開業医はできないのかもね。しかしタレントの売り出し方にも「脱ぐ」以外にいろいろあるものである。

落ち目のタレントはすぐアノ手の写真集を出すのが、年輪を感じさせるだけで、「袋とじ」を開けるのさえ面倒なのが多い。「垂れんと」ってのはこれが由来かも知れぬ。

## 6. とっても大好き…①

××エモン曰く「金で買えないものはない」。この言葉に違和感をもちながらテレビを見てみると、アイドル風の女性タレントがマイクを持って「忘れな～いで、お金よ～りも大切なものがある」と歌い出し「大切なのは貴方」と結んだ。いい事言うなあ、と感心しながら聴いていたら、なんとこれがサラ金（消費者金融）のCMだった。冗談きついね。いや「大切な貴方」が金蔓かねづるという意味では真理かも。

## 7. 間違いだらけの医学部選び

自分自身の医学部受験は30年以上前のことであり、今はだいたい事情が違うようだ。国公立の場合、今はまずA.センター試験がある。B.面接も、C.小論文も、D.高校の調査書もある。B、C、Dのない学校もあるが、Aは必ずある。このうちB.面接が結構くせもの曲者で、これには2種類ある。1つは「高校時代の思い出は？」「スポーツは何をやってましたか？」

「医師を志した動機は？」などと通り一遍の事を尋ねて5分か10分で終わるものである。もう1つは医療問題等を主題に掲げてじっくり聞いたり、グループ討論を30分～50分行うものである。前者は「アブナイ人」を取り除くだけの目的なので大して気にしなくて良いのだが、後者は点数化して（「点数化する」と明記してある）学力テストと併せて合否判定をするというのだから怖い。小生ならこれで落とされているだろう。しかし前者の場合でさえも油断できない。過疎県の大学の面接試験時に「そりゃー、都会の方が好きです」（だったら受けに来るな）「充実した施設で研究に身を捧げたい」（田舎にゃないんだ、そんな施設は）「卒業後は都会に帰って研修したい」（初めから都会でやれ）など「」内の如くに答えると、よい結果は期待できそうもない。という訳で「地域医療に意欲があります」「趣味はボードウォッチングと家庭菜園です」「無医村をなくしたい」などと回答する受験生のオンパレードだそうである（某大学教授の嘆きが聞こえそう）。

## 8. とっても大好き…②

ゴジラのシリーズ映画では日本各地の有名な建物をゴジラやライバル怪獣が次々に破壊した。横浜ランドマークタワーも都庁も京都駅も熱海城も壊されたが、映画の中とはいえどんな建物でも壊してよい訳でもないらしい。映画の中とはいえ壊すのが<sup>はばか</sup>憚られるものが日本国内に2つあり、それは東京ディズニーランドと皇居なんだそうである。ところで××エモンさん、「金で買えないものはない」ならば皇居は金で買えるんですかい。

## 9. 医学部受験ウルトラ大作戦

受験生A君の悩みは尽きぬ。「小論文が不得手だ」とパパに相談すると「安心しなさい。4行も書かずとも入学させてくれる学校もあるんだから」「?? どの学校」「3行医大さ」……と言っているうちに受験は迫ってきた。自分が入学する訳でもないのに

「北国は寒いからよせ。暖房費がかかる。スノータイヤも高い」「日本海側はミサイルが飛んでくる」「沖縄はハブに咬まれる」「北海道はヒグマに喰われる。キタキツネのエヒノコッカスも怖い」「広島はヤクザに撃たれる（東映の『仁義なき戦い』シリーズの見過ぎか）」などと主張する。それでも受かりそうなところ（そんな所あるんだろうか）を求め、ひかりは西に。のぞみも西に。めだかの兄弟ではないが「のぞみ、かなえ、たまえ」と、微かなのぞみを求め西方移動。産業医大も西にあるが難しそう。先年、頭の尖がった奴が唄った『佐賀県』てのが流行ったので佐賀大学も難しくなりそう。流行ったと言えば鳥インフルエンザ、そうだ、茨城か山口か大分だ。インフルエンザを避けて受験生が減るかも……と思って、つくばエクスプレスと新幹線駅のあるところは避けて行ってみたところで、滑って転んでおお痛けん、てな具合になりそうなので、方向を少し変えて出雲大社への願掛け計画を立てたが、<sup>おおくにぬしのみこと</sup>大国主命のお耳には届くかどうか。

## 10. よしな、宅浪

われわれが受験生の頃は「吉田拓郎」をもじってこう言ったものだ。A君のパパはケチなので入試が全敗で終わり、3月半ばになっても予備校の授業料を出すそぶりが無い。A君ははなから「宅浪」するものだと思い込んでいたところ、ある日思いがけずパパから予備校の申し込みに誘われた。

2人で予備校の建物に入っていくと「講義の試聴」（もちろん受験生向き）というのがあったので、パパは受験生の振りをして「椿三十浪です」とか言って入り込もうかと企てたが、教室の入り口で「よろしかったらお父様もどうぞ」などと言われて肩透かしを喰った。用が済んでふと建物を振り返ると予備校のでっかい看板が目についたが一瞬「soon die」と見えた。「もうすぐ死んじゃいそうな」名前の予備校だった。

# 大昔の話（Ⅲ）

＊

## 老祥樹

明治33年（1900）、34歳になった吾輩は留学のためロンドンに旅立った。途中、神戸で妻、鏡の妹夫妻の見送りをうけた。その際、当時は珍しい万年筆を饒別に貰った。まだ日本を離れていないのに船酔いが激しく、これからどうなる事になるかと心配だ。長崎を最後に太平洋、インド洋に行く事になる。9月中旬上海に上陸した。同行留学生のうち芳賀矢一<sup>④</sup>以外は船酔いに苦勞した。上海で吾輩の先輩、東京帝国大学英文科1回生の立花政樹<sup>®</sup>を訪れ、夕食を共にした。

9月19日には香港で日本食を食べた。香港の夜景の素晴らしさに大いに感動し、驚いた。

9月25日にシンガポールに上陸して、植物園、動物園、博物館などを観て「松屋」で昼食をとった。インド洋上を航行中は比較的涼しく、船酔いも治まり、元気になった。セイロン（現スリランカ）のコロンボでカレーライスを食べ、スエズ運河を聖てポートサイドから地中海に入った。日本を離れて1ヶ月が過ぎた。10月17日にイタリアのナポリに着き、寺院、博物館で見事な彫刻、ポンペイの発掘物などを見学した。パリで万国博が開催されていると聞き、この際でなければ見られないと思い、ジェノバから汽車でパリに向かった。10月21日にパリのリヨン駅に着いた。

吾輩は正木直彦（東京帝大法科大学卒、岡倉天心の後をついで東京美術学校の校長になる）を訪ねたが不在、また浅井忠<sup>®</sup>にも会へなかった。「パリ万博」は渡部董之介氏（文部省書記官、のちフランス大使）に案内され楽しく観た。日本からは奈良朝から江戸時代に及ぶ代表的美術品が展示されていた。

10月28日の朝パリを出発し、夜7時にロンドンに着いた。ロンドンでののはじめての下宿は食事付で約6円だった。近くに大英博物館があったものの、街の様子がさっぱり分からず実に困った。それでもまずロンドン橋、ロンドン塔を見物し、夜はヘーマーケット座で『悪口学校』を観た。さて、吾輩は英文学の研究をケンブリッジ大学にしようか、オックス

フォード大学のどちらにしようかと大いに迷った。そこで友人に誘われてまずケンブリッジ大学に行ってみた。そこで会った2、3の日本人は留学生ではないので豊かな生活をしていた。とても吾輩の支給額1800円／年では生活出来ないし、オックスフォードも同じと思いロンドン大学に決めた。ロンドン大学のケア教授<sup>®</sup>に面会を求め、講義も聴いた。中世文学の講義だった。ケア教授の講義は興味はあったが、彼の紹介でシェクスピア研究家のアイルランド人のクレーグ教授<sup>®</sup>に個人教授を頼むことにした。

この頃下宿を変へた（2回目）。下宿の主人はドイツからの移住者で下宿料は週2ポンドだ。

個人教授は毎週火曜日で1時間5シリングだった（注：1シリングは1/20ポンド）。

こうして吾輩の英国留学生活がはじまった。

この年の暮に下宿をまた変へた（3回目）。吾輩の他に2、3名の日本人がいて、週25シリングだった。外国で初めてのクリスマスを迎え、あひるを御馳走になった。妻、鏡より便りがあった。吾輩も鏡に手紙を出した。「ロンドンの物価は高く、日本の50銭はロンドンでは10～20銭で10円は2、3回買物に行くと飛んでしまう。即ちロンドンでは日本の3～5倍の費用がかかる。ロンドンは留学生は少なく、官吏、商人が多く、彼等は金廻りがよく、吾輩の数倍でありまことに羨ましい。それでも吾輩は出来るだけ節約し、可能な限りの書籍を買いたいと思う」、とこんな内容の文面を妻に送った。こうして吾輩はロンドンで初めての大海日、正月を迎へたが、日本とはまるで違って静かなものだった。伝へ聞く処によると、日本では選挙法改正で直接国税10円を収める25歳以上の男子のみに選挙権が与えられるようになった由。しかしこれは全人口の僅か2%の96万人、成人男子の8%であるそうだ。またこの年はフロイトが『夢判断』を発表し、ニーチェが亡くなった。

明治34年（1901）、吾輩は35歳になった。

正月早々にトットナム・コート街で本を約100冊買った。ロンドンでは余り太陽を見る事がなく、い

つもどんよりして、最近の吾輩の心持ちのような気がする。毎週クレグ教授の処に通っている。久方ぶりに妻、鏡より手紙が届いた。1月26日に次女恒子が生まれた。英国王、ヴィクトリア女王が死亡した。吾輩はクレグ教授の個人教授を受けながら、美術館を観たり、公園を散歩しながら、これからの吾輩の進むべき道を模索していた。時には金を節約するために公園のベンチでサンドイッチを食べたり、薄く切った肉とパンをかじりながら。生活費を出来るだけ切りつめ、本を少しずつ買い集めている。2ヶ月遅れで山川信次郎<sup>③</sup>、菅虎雄<sup>①</sup>、大塚保治<sup>④</sup>、狩野享吉<sup>⑤</sup>から年賀状が届いた。これら年賀状を楽しく読みながら、日本に早く帰りたいと思った。またその一方で、吾輩は留学を延長し、フランスに数ヶ月行ってみたいなどとも思ったりした。また帰国したら熊本の五高には行きたくない、東京で生活したいと思った。

大塚保治、菅虎雄に吾輩の希望が叶えられるように手紙を書いた。本を買い過ぎたため金が底をついたので同宿の長尾半平氏に20ポンドばかり借金した。総領事館よりグラスゴー大学の試験委員に任命すると通知を受け、大いに驚いた。

なぜ吾輩が試験委員に選ばれたか理由はほとんど分からなかった。4月下旬に下宿を変へた、4回目である。5月になり池田菊苗<sup>⑥</sup>がベルリンからロンドンにやって来て、しばらく吾輩の下宿で過した。彼と世界観、禅、教育、中国文芸、理想の美人などについて意見を交換した。池田菊苗と話して吾輩は彼の偉大さを、しみじみ感じ敬愛の念を深めた。短い日時ではあったが、彼が吾輩に与へた影響は実に大きなものだった。最近よく本を読み、勉強ばかりしているせいか気分が優れない。

少々神経衰弱気味で夜もよく眠れない。7月中旬また下宿を変へた。5回目である。テムズ河南岸の住宅街で、退役軍人、フランス語を上品に話す老婆姉妹などが同宿している。

吾輩の部屋は3階だったので大量の書籍を運ぶのに苦勞した。この下宿で吾輩は帰国までの1年半を過した。ロンドンでの最後の下宿だった。下宿の3階の自室に一日中閉ぢ籠って『文学論』を書く準備をした。材料の収集、読書、思索に没頭した。そのためか神経がひどく痛み、神経衰弱がひどくなった。8月初旬に池田菊苗を訪ねたあと、カーライル博物

館を見学した。恐らく日本人として初めてかも知れない。パリから土井晩翠<sup>⑦</sup>、志賀潔がロンドンのヴィクトリア駅に着いたので迎へに行った。また日本に帰国する呉秀三、池田菊苗をテムズ河アルバート埠頭に見送り、吾輩も早く日本に帰りたいと思った。同時に吾輩は将来は著作に専念すると心に誓い、もっともっと勉強しなければならないと思った。それからは下宿の3階で本をむさぼり読んだ。読んだ処々に傍注をつけ、必要な事項は蠅の頭程の小さな、細かい字でノートをとる事にした。時々、気晴らしに公園を散歩したり、演劇を観に行ったりはしたが。年の暮れは猛烈に本を読んで勉強していたのでクリスマス感概はまるでなかった。

明治35年(1902)、吾輩は36歳になった。

正月早々に妻、鏡より便りがあつた。新聞により1隊210名のうち197名が凍死した八甲田山の事故を知り驚いた。日英同盟がロンドンで調印された。最近の吾輩は心理学、進化論に興味を覚へ、手あたり次第に読んでいる。4月中旬に中村是公<sup>⑧</sup>がロンドンに来た。彼との再会は実に嬉しかった。久方ぶりに2人で遊び歩いた。彼は吾輩のロンドンでの生活の困難さがよく分かつたようだ。吾輩はふとこの時、日本に帰ったら蕎麦、日本米を食べ、縁側に寝ころんでみたいと思った。6月の末に浅井忠が帰朝する途中ロンドンに立寄り、吾輩の下宿に泊まった。彼は帰国して新設される京都工芸学校の教授になるそうだ。東京からの便りによると、野上豊一郎<sup>⑨</sup>、小宮豊隆<sup>⑩</sup>、藤村操<sup>⑪</sup>、安倍能成<sup>⑫</sup>、斎藤茂吉らが第一高等学校に入学し、彼らの1級上には岩波茂雄<sup>⑬</sup>、阿部次郎<sup>⑭</sup>、さらに2級上には森田草平<sup>⑮</sup>、小山内薫<sup>⑯</sup>がいるそうだ。吾輩は近頃また神経衰弱がひどくなって来たので気分転換のために自転車の稽古をはじめた。悲しい知らせとして吾輩の朋友正岡子規が死亡したと便りがあつた。10月初旬、スコットランドに旅した。大いに気晴らしになった。吾輩と同じ船でドイツに留学していた藤代禎輔<sup>⑰</sup>が帰国に際し、ロンドンに来た。ケンジントン博物館、大英博物館などを案内し、大英博物館のグリルで焼肉を2人で食べた。吾輩も彼と一緒に帰国する予定だったので船の予約をしていたが、スコットランド旅行などで帰国の準備が間に合わず、予約は取消した。彼は吾輩の買い集めた書籍には大いに驚いたようだ。高浜虚子<sup>⑱</sup>、河東碧梧桐(俳人)からの手紙

で子規の臨終の様子を知った。ストーブの傍<sup>かたわ</sup>らで吾輩は「筒袖や秋の柩にしたがわず」、「手向うべき線香もなくて 秋の墓」、他2句計4句詠んだ。

12月5日に吾輩は日本郵船の「博多丸」に乗り、ロンドンを後に日本に向かった。ロンドンを去るにあたり、吾輩はもう2度とイギリスなんかに来るものかと思った。ロンドンの留學生活はそれ程に暗く<sup>くら</sup>て惨めな<sup>みじ</sup>ものだった。ただ一人黙々と勉強に勉強を重ねた。そのため神経衰弱にもなった。漱石は発狂したのではないかと、或る人により日本に伝えられたと、帰国後に知った。しかし、この留學により英文学に対する自分の立場をはっきり決め、また物事を自己本位に考へるようになり、大きな自信を得たと思った。そう考へて帰途についた。この年の東京市の戸数408,388戸、人口1,693,135人でそのうち英国人198名、アメリカ人298名、ドイツ人83名、フランス人81名が東京に住んでいた由。

注：人名、一部再掲載（※）、①～⑯は「神皮No.11」

P20～21、⑳～㉓は「神皮No.12」P13参照

- ④\* 芳賀 矢一：東京帝大國文科卒、ドイツ留學後東京帝大教授
- ⑧\* 立花 政樹：東京帝大英文科第1回卒業生
- ㉒\* 浅井 忠：洋画家、『吾輩は猫である』（中・下篇）の挿絵を画く

- ㉔ ケア教授：オックスフォード大学詩学教授
- ㉕ クレーグ教授：シェクスピア研究家、吾輩のロンドンでの師
- ⑭\* 山川信次郎：吾輩の一高時代の同級生、英文学者
- ⑪\* 菅 虎雄：吾輩の大学時代からの友人
- ⑯\* 大塚 保治：吾輩の2年先輩、東京帝大初代美学講座教授
- ⑨\* 狩野 享吉：吾輩が兄事した先輩、京都帝大初代文科大学長
- ㉘ 池田 菊苗：東京帝大教授、「味の素」発明者、科学者
- ③\* 中村 是公：吾輩の終生の朋友、満鉄総裁、東京市長、文学とは一切無縁な人
- ㉙ 野上豊一郎：東京帝大英文科卒、法政大学教授
- ⑩ 小宮 豊隆：東京帝大独文科卒、東北帝大教授、吾輩の門下生の中心的人物
- ⑪ 藤村 操：一高在学中に日光華嚴ノ滝で自殺
- ⑰\* 安倍 能成：東京帝大哲学科卒、学習院院長
- ⑳ 岩波 茂雄：東京帝大哲学科卒、岩波書店創業
- ㉑ 阿部 次郎：東京帝大哲学科卒、東北大学教授、『三太郎の日記』の著者
- ㉒\* 森田 草平：東京帝大英文科卒、法政大学教授
- ㉓ 小山内 薫：東京帝大英文科卒、劇作家、小説家
- ⑩\* 藤代 禎輔：東京帝大独文科卒、京都帝大教授、吾輩と同じ船でドイツに留學

